侏儒の叫び　－創刊の辞－

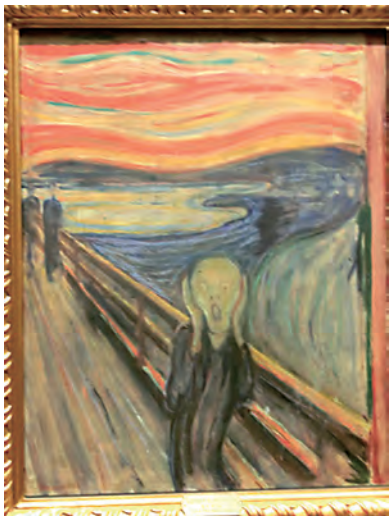
森田　廣

山陽小野田市立山口東京理科大学　学長

Dwarf's cry

Hiroshi MORITA

President, Tokyo University of Science, Yamaguchi



オスロ郊外の高台にある道の端で、大気に立ち込める重苦しい気配に耳を塞いで叫んでいるかのように見える、極端にディフォルメされた人物。このムンクの絵画の異様なまでの気迫には圧倒される。「自然を貫く果てしない叫び」に怖れおののいて耳を塞いでいるとの解釈が一般的とされるが、現代を生きる私たちは、この絵を奇異とは感じないどころか、共感をもって受け入れることができる。現代人は、時間と共に指数関数的に増える大量の情報の真っ只中にいる。そして、大多数の人は、自らは何も発信できないことへのもどかしさから、何らかの疎外感を感じているのではないか。氾濫する情報をいかに効率的に生活や生産活動に取り入れるか、工学や科学の研究者、技術者たちは、この人懐っこく厚かましい「情報」の調教に余念がない。しかし、これら情報を系統的に咀嚼するすべを知らない、善良な一般の人々は、あまたの情報の洪水に一言も発せずに、埋もれてしまうほかないのか。

いや、生きとし生けるもの、この小さな存在にも、喧騒に惑わされずに自己主張する権利はあるはずである。ましてや、人類は文字という、暗黙知をデザインする格好の手段を備えているではないか。私たちも、今、ここに、『紀要』の刊行という、絶好の表現の場を得た。

本学は工学をよすがとする創基から30余年を経て、公立大学となり、来年度からは、薬学部を併設する。地方創生の時代という、天の時と地の利が整い、地域や市民との人の和が備わった今こそ、まだ名も無い小冊子から集団の尊い叫びを発して、世に問いたい。無窮に存在する情報に抗して、誰にでも平等に自己主張のできる舞台を用意したい。そのような思いで、瀬戸内の小さな学び舎から本誌を発刊することを声高らかに謳い上げ、創刊の辞といたします。（挿入写真は筆者が、オスロの美術館で撮ってきたもの）